

新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net



新年あけましておめでとうございます。新九郎もおかげさまで19年目を迎えることが出来ました。

本年も油絵、日本画、版画、デッサン、スケッチ、絵手紙、写真。個展、グループ展、企画展など、多くの楽しい展覧会が予定されています。『生活にアートを』をテーマに、本年も皆様の暮らしを豊かにする場として、共にいい時間を過ごしていきたいと思ひます。一人でも多くの方に足を運んでいただき、心豊かな時をお楽しみいただけるよう、新九郎通信共々皆様への情報発信もより充実させていきたいと思ひています。新年は1月21日より「たのしむコトモノ展」でスタートします。本年もどうぞよろしくお願いいたします。



新九郎 1月の展覧会のご案内

	会 期 展覧会名	見どころ
	1/21 (水) ~ 26 (月) たのしむコトモノ展	Art&Craft/Work Shop コンテ×旧三福コラボ 10:00~18:00(土曜日は 19:00、 最終日は 17:00 まで) 24 (土) 中山彩×コロロコリ× hise によるライブペインティング 25 (日) ミントココアカフェコーナー
	1/28 (水) ~ 2/8 (日) 2/3 (火) 休館 高木彩展 GLEAM	10:00~18:00 (最終日 17:00 ま で) 2/1 (日) 15:00-レセプション 裏面にアトリエ訪問掲載
	1/16 (金) 新九郎デッサン会	どなたでもお気軽にどうぞ! 18:15-20:45 会費 1500 円 コスチューム、固定ポーズ

近隣・友の会会員の展覧会情報

会期・展覧会名	会 場
12/2 (火) ~ 1/12 (月) しあわせの燭卓	ならやあん 水・4 木休 0460-82-1259
1/4 (日) ~ 1/6 (火) 神奈川子どもの詩の展覧会	アオキ画郎 2F 0465-24-0637
1/15 (木) ~ 1/19 (月) 2015 西相美術新春展	アオキ画郎 1・2F 0465-22-0825
1/7 (水) ~ 2/2 (月) 新春富岳展	お堀端画廊 0465-23-7819
1/7 (水) ~ 1/13 (火) 樸々回顧展	ぎやらりー ぜん 0463-83-4031
佐部利典彦展 1/6 (火) ~ 1/18 (日)	すどう美術館 0465-36-0740
第 97 回西ゆり会美術展 1/8 (木) ~ 1/12 (月)	ツノダ画廊 0463-83-9550
セピア色の写真展 2015 -小田原今むかし- 1/9 (金) ~ 1/28 (水)	HaRuNe 小田原 ハルネギャラリー
1/8 (木) ~ 1/12 (月) 慈善絵馬展	報徳二宮神社 0465-22-2250

東海道五十三次 17 赤坂宿 (大橋屋)

5 年をかけ、足で歩いたスケッチ紀行 松野光純



赤坂宿には大橋屋という古い旅館がある。この旅籠屋は現在も旅館として営業している。

正徳 5 ~ 6 年 (1715 ~ 16) 頃の建物で、赤坂宿の全盛期における旅籠屋の形態をよく残しており、町指定有形文化財になっている。大きな提灯が印象的な「大橋屋」をスケッチしたいが道幅がせまいので描ける場所がない。そこで、道をはさんで反対側のお宅の駐車場の隅をお借りしてスケッチさせてもらった。

愚うことなど 横井山 泰



あけましておめでとうございます。

2015 年からは最終的な目標に漠然でなく、計画的に進んで行こうと思ひます。そして 30 代最後の年です。29 才になった頃、年上の作家から「楽しい時期でしょ？」と言われ「全然楽しくないよ。」と思ひた記憶があります。失恋直後だったのです。38 才の昨年も悩む事ばかりで「人生で 1 番楽しいだろ？」と年配の大家に言われて「はい」と言いつつ、な場面もありました。代の終盤には悩む運命なのかも知れません。とは言え、昨年末には念願の事も叶い、いい年でした。きっと良くなる一方です。

今年は絵本の新作。新しい絵画のシリーズの展開。などなどワクワクする事が目白押しです。戯れに作った積木パズルが以外と評判です。

本年もよろしくお願い致します。



第22回 アトリエ訪問 高木彩 八王子在住

話題の圏央道を車で1時間半。高木さんは閑静な八王子のマンションで制作・生活をしている。大きな作品は横浜の実家で管理をしているのだが、アトリエには制作中の作品が何点も掛けられ、エネルギーに満ちていた。



高木さんの作品を始めて観たのは昨年だ。キュレーターから届いた1枚のDMに惹かれ綾瀬の市民ギャラリーに出向いた。オープンスペースのギャラリーに並ぶ作品群、120号の画面たちが発する豊かな色彩に圧倒され、たちまち魅了されてしまった。ぼんやりとじむ画面は、初めて会った気がしないどこか懐かしい気持ちになる安らぎを覚えた。ピンクのニットにミニスカートの、丸の内で見かけるとようなパンプスの似合う才色兼備な小柄な女性が、作家高木彩さんだった。

小学校では絵本クラブ、中高は美術部、コンクールでは受賞歴を重ねる子どもだった高木さんが進路を決めたのは15歳。医大を目指す仲間たちのように、一生続けていける仕事を考えたとき、絵を描くことなら自分は負けないと高1で決めたという。まさに「吾十有吾にして学に志し」だ。

絵の基本は受験前に学んだと言いきった。受験という目的がなくなった大学では、予備校時代使えなかった色を求め、自分を取り戻すように一年間人物、動物、風景などの具象を描き続けた。大学では、常に自分の表現を目指すことを求められた。自由に描く中から「描くこと＝描写することではない」ということを掴む。そして、興味のあった色彩の追究が始まった。

大学3年は、自分の進路について大いに悩んだ時期だという。大学院の名誉教授だった「李禹煥リ・ウーファン」の特別講義で「美術なんてやめた方がいい。ぼんやり描いていても生き残れない」という言葉に衝撃を受けた。就職したら絵を続けられなくなるという強い気持ちに気づき、大学院への進学を決めた。その強い気持ちは、2010 トーキョーワンダーウォール賞、3年連続シェル美術賞入選、ワンダーシード2012入選、第7回はるひトリエンナーレ入選、第1回損保ジャパン美術賞FACE2013読売新聞社賞など数々の受賞が物語っている。卒業して6年、周りを見ると作家として活躍する人は少なく、改めて続けることの厳しさを実感しているという。4年間の多摩美の助手を経て、現在は絵画教室の講師をしながら作家生活を続けている。

高木さんのモチーフには、花や植物がよく登場する。通勤の道

で見かける民家の木、庭先の枝、つぼみから開花する自然の営みを繰り返し見る中から自分に記録されていく花や枝に惹かれ、触発されるのだという。物を見て描くスケッチはしない。写真というフィルターを通し、必要な要素だけを切りとって画面を構成するという仕事の進め方に、「描くこと≠描写」を追究し、自身が本当に描きたいものを描くという強い思いが伝わってきた。

対象に対する自分の想いが出てつい描写したくなることを避けるため、あんなに描いた人物や動物は避けているという。あくまでも客観的に対象との距離を置き、構図・構成を初めから決めて描き始める。まるで出来上がった作品が見えていて創り上げていくような論理的な作品にもかかわらず、作品からは温かな感情や抒情があふれている。自分自身を常に客観的に見ながら自分を表現することに邁進する姿は、作品の柔らかさとは対極の、強い意志と自信、常に自分の表現を目指すプロとしての熱い姿勢が伝わってきた。

キャンバスは、下地の無い綿布だ。色を乗せた綿布を貼り、アクリルの色をしみこませ重ねていくという描き直しのきかない技法だ。油絵具の物質的な重さを何とかならないかとたどり着いたアクリルの使いやすさと軽さが合っているという。

好きな作家にマーク・ロスコ、モランディーを挙げた。また、花や植物を構図と色という少ない要素で表現した琳派にも、憧れがあるのだという。同じものを描いても描写ではない画面、空間の構成、形の考えられた構図には、共通点を感じる。

目黒の絵画教室では幼児と小学生300人を週5日6時間勤務で指導に当たっているが、なかなかハードな仕事のような。子どもの描く作品の面白さに触れることでパワーをもらって楽しんでいる。セレブ層の子女が多いというが、隣接するギャラリーにはほとんど足を運ばないという。意外だが今の日本の文化水準を表す一例だろう。絵画教室も水泳ができるようになるためのスクールと同じなのか。子どもたちの感性を磨き育てるのは、描く体験と同時に観る、感じる体験、環境が大事であることもぜひ伝えてあげてほしい。



アトリエで、気になるものが目に留まった。読書人の雑誌『本』（講談社）だ。なんと高木さんの作品が表紙を飾っていた（2013.8）。毎月夫が持ってくる冊子は、表紙作品も楽しみな愛読者の一人だ。作品に初めて出会ったのではない気がしたのは、気のせいではなかったのだ。「日本の美質を最良の形で受け継いだ若き旗手」表紙を飾った作品に選者高階秀爾が贈った言葉である。

2015年新九郎のスタートを飾るTAKAGI Aya GLEAMは、是非多くの方にお楽しみいただきたい新九郎お年玉企画と言える。（新九郎友の会 木下和子）

絵てがみ折々 ー小田原の暮らしの中でー

野地 三恵

昨春、京都に行ってきた。京都が舞台のテレビドラマで、鴨川の飛び石を渡る光景が見られるが、あれをやってみようと思ったのだ。

鴨川には五か所の飛び石があるというが、その内の二か所に行ってきた。賀茂大橋のすぐ北、「高野川」と「賀茂川」が合流する地点と荒神



橋の北側だった。川中に「亀」や「千鳥」の形の石が配置され、その上を歩いて渡れるようになっている。石と石の間は思ったより広く、流れも早い。水鳥も多くいて時の経つのを忘れていた。

翌日は伏見の酒蔵めぐりで、お土産は伏見人形の「羽織猫」。招き猫の上げる右手は金運、左手は人を招くというが、今年も健康とのんびりした旅を招き寄せてほしいものだ。

12月のこと

●橋本様々回顧展は盛況であった。東泉院所蔵の100号「廓然虚明」、松永記念館中川与一コレクションのデッサン1点、所蔵家からの出品4点、油彩・コラージュ等合わせ45点と充実した内容であった。またご子息の橋本龍さんが資料類を集め、これも作家を理解する参考になった。三笠会館の社内報「ルンビニ」の表紙絵や大法輪のカット、雑誌の紹介記事、洲之内徹「気まぐれ美術館」掲載記事、禅関係書籍のカット等、ノートには1冊まるごとスケッチが描かれ、本制作にいたるまでの過程がよくわかる貴重なものだ。また今展覧会に合わせ制作された小冊子はカラー図版4点、扣の帳の橋本様々特集、東泉院岸老師の寄稿、年譜が添えられ記念すべきものとなった。大法輪のカットは木版刷りで、日付を入れきちんと整理し和綴じされ、先生が大切にされていたことが偲ばれる。かなりの厚さで2冊あり、そのどれもがすばらしく改めて優れた作家であると感じた。1月には「ぎやらりーぜん」でも展覧会が開催される。まだ一部の人にしか知られない特異な作家であるが、もっと多くの方々に見て頂ければと思う。

●新九郎アートフェスティバル2014は団塊の世代と30代の作家という構成となった。若い作家達はシェル美術賞展、神奈川県展、他コンクール等で受賞歴もあり作家としてのキャリアを着実に重ねている。陶芸作家は年明けに横浜高島屋での個展を控えるなど実力派が揃った。中央での発表とともに小田原での展覧会にも参加して頂きありがたいと思う。絵画教室を主宰する作家は、毎年教室の展覧会に1点出品されるのだが、良い絵なので今回参加して頂いた。若い作家との展示は刺激になったようだ。レセプションではギャラリートークがあり、イメージの源泉として写真を利用する。日常で出会うハッとした体験が作画の動機となる。昔の画風に立ち戻り、新しい表現の可能性を試みている。等作家の生の声が聞かれ楽しいものとなった。作家同志の交流も図れ和やかなひと時を過ごせた。④